

星の子

小川未明

青空文庫

あるところに、子供こどもをかわいがっている夫婦ふうふがありました。その人ひとたちの暮くらしは、なにひとつとして不足ふそくを感じかんずるものはなかつたのでありましたから、夫婦ふうふは、朝あさから晩ばんまで、子供こどもを抱だいてはかわいがっていることができました。

子供こどもは、やつと二つになつたばかりの無邪気むじやきな、かわいらしい盛りさかでありましたので、二人ふたりは、子供こどもの顔かおを見ると、なにかもわす忘れてしまつて、ただかわいいというよりほかに思おもうこともなかつたのであります。

「どうしてこんなに無邪気むじやきなのでしょうね。赤あかちゃんの目めには、なんでも珍めづらしく見みえるのでしようね。ほんとうに、こんなときは

かみ
神さまも同じなんですからね。」と、妻は、夫に向かつていいま
した。

おつとめ
夫も目を細くして、じつとやさしみのある目を子供に向けて、
妻の言葉にうなずくのでありました。二人は、同じように、我が
子をかわいがりました。中にも妻は女であるだけに、いつそう
かわいがったのであります。

しかし、この世の中は、美しい、無邪気なものが、つねに、神
に愛されて変わりになしにいるとばかりはまいりません。美しい、
無邪気なものでも、冷酷な運命にもてあそばれることがたび
たびあります。それはどうすることもできなかつたのでありま
した。

こんなに、二人ふたりが大事だいじにしていた子供こどもが病び気きにかかりました。
 二人ふたりは、どんなに心しん配ぱいをしたでしょう。あらんかぎりの力ちからをつ
 くしたにもかかわらず、小ちひさな、なんの罪つみもない子供こどもは、幾いく日にち
たかか高い熱ねつのために苦くるしめられました。そして、そのあげく、とう
 とう花はなびらが、むごたらしい風かぜにもまれて散ちるように、死しんでし
 まいました。

その後あとで、この二人ふたりのものは、どんなに悲かなしみ、なげいたであ
 りましょう。自分じぶんたちの命いのちを縮ちぢめても、どうか子供こどもを助たすけたいと、
 心こころの中なかで神かみに念ねんじたのも、いまは、なんの役やくにもたちませんでし
 た。

「この世よの中なかには、神かみも仏ほとけもない。」と、二人ふたりはいつて、神かみをう

らみました。

それからというものは、りっぱな家も、広い屋敷も、ありあまるほどの財産も、二人の心を満たすことはできませんでした。ふたり二人は、もし、それらのものを亡くした子供と換えることができたら、あるいはそれらのものを投げ出すことを惜しむものではないか。あったかもしれません。どんな貴重なものも、子供とは、どうして比較になるものではないと、しみじみこのときだけは感じたのであります。

二人は、金を惜しまずに、子供のために、美しい、小さな大理石の墓を建てました。そして、そのまわりに花の咲く木や、いろいろの草花を植えました。けれど、これだけでは、かぎり

ない思いやりに対して、その幾分をも消すことができなかつたのです。

寒い風の吹く、暗い夜に、女は、いまごろ、子供は墓の下で目を覚まして、どんなにさびしがっているだろうかと思うと、泣かすにはいられませんでした。

すると、男はいいました。

「なんで、あの凍った冷たい地の下などにいるものか。いまごろは、神さまにつれられて天国へ行って遊んでいる。」といいました。

「そうでしょうか？」

「そうとも、天国へ行って遊んでいるよ。」と、男は答えまし

た。

「そんなに、遠い、高いところへならいかれませんが、もし歩いていけるところなら、幾千里、遠い、遠く国のどんなさびしい野原でも、子供がいることなら探していきますのに……。」と、女はいつて、泣きつづけました。

二人は、もう、ただ子供の死んでいつてからのしあわせを、いまでは、思うよりほかに途はなかつたのであります。

そのとき、ちようど、過去、現在、未来、なんでも聞いてわからないことはないという占い者がありました。

女は、さつそくその占い者のところへいつて、自分の死んだ子供のことをば見てもらいました。占い者は、死んだ子供の過去、

現在、未来を見て語りました。

「あなたがた二人には、長い間子供がなかったが、信神によつて、子供が生まれました。けれど子供は、まだこの世の中にくるのには早かった。早いというのは、この世の中があまりに汚れすぎています。それでも一度、星の世界へ帰ることになりました。しかし、短かったけれど、この世の中に出てきたうえは、苦行をしなければ、ふたたび天国へ帰ることはできません。

いま、あなたの死んだお子供さんは、高い山の頂に、真つ赤な小さい花をつけた草になつていられます。いまごろは、山には雪が降つていますから、雪の中にくずもれています。そのうちに神さまのお召しによつて、星の世界へ帰られます。この後、あな

たがたの信神しんじんによつては、もう一度この世よの中なかへ出でてこられな
いものでもありません。」

占うらいなしや
占うらい者は、このようにいいました。

これを聞きいて、二人ふたりは、わが子こに對たいしてあれほどまでかわいが
り、また大事だいじにしたけれど、まだ足たりなかつたか？ まだ二人ふたりの
真まごころ
真まごころは、通つうじなかつたかとなげきました。女おんなは、夜よる、外そとに立たつ
て、月つきのさえた、青あおい空そらをながめました。そして、いまごろ、高たか
やまうえの雪ゆきの光ひかる下したに、草くさとなつてふるえている、わが子この傷いた
ましい運命うんめいを思おもいました。

いまから、すぐにも、彼女かのじよは、旅立たびだちをしてその高たかい山やまに、
雪ゆきを分わけて登のぼつてゆこうと思おもいましたが、もとよりどこに草くさがう

ずもれているか知ることができなかつたのです。このうえはただ、もう一度信神の力で、子供を自分の手に帰してもらおうよりほかに、どうすることもできないと知りました。

彼女かのじよは、その日ひから毎日まいにち、神かみに願がんをかけて、「どうか死しんだ子供こどもが、もう一度帰どかえつてきますように。」と、宮みやや、寺てらへいつて祈いのつたのであります。

こうするうちに、春はるもだんだんに近ちかづいてきました。しかし、まだ木きが芽めぐむには早はやく、風かぜも寒さむかつたのであります。ただ雲くもの切れ目めに、ほんのりと柔やわらかな日ひの光ひかりがにじんで、なんとなく、なつかしい穏おだやかな日ひがつづくようになりました。小鳥ことりは、庭にわの木立こだちにきて、よい声こえでさええずつていました。

日ひがたちましたけれど、彼女かのじよの子供こどもを亡なくした悲かなしみは、ますます鋭すく、胸むねを刺さしてたえられなくなつて、彼女かのじよは、毎まい日にちのように子供こどもの墓はかにお詣まいりをしました。そして、どうか、もう一度どう生まれ變かわつて歸かえつてくるように祈いのりました。

ある夜よのこと、女おんなは、不思議ふしぎな夢ゆめから、驚おどろいて目覚めめました。

「おまえが、それほどまで子供こどもをかわいがるなら、もう一度どあの子供こどもをかえしてやろう。明日あすの晩ばんに、おまえは独ひとりで、町まちの西にしの端はしに河かわが流ながれている、あの河かわを渡わたつて、野原のはらの中なかにいつてみれ、おまえの子供こどもが、なにも知しらずに遊あそんでいるから……。」

こういつて、見みなれない、白しろいひげのはえたおじいさんが、あちらの方ほうを指さしたかと思おもうと、目めがさめたのであります。

そのことを彼女かのじよは、朝あさになつて、夫おつとに告つげました。

「それは、おまえが平常へいぜい死しんだ子供こどものことばかり思おもつていゝから、夢ゆめを見みたのだ。そんなことがあるものでない。」と、夫おつとはいいました。

しかし、女おんなは、どうしても、昨日きのう見みた夢ゆめを忘わすれることができませんでした。きつと神かみさまが私わたしのお願ねがいをかかなえてくだされたのだらう。とにかく自分じぶんは夜よるになつたら、野原のほらにいつてみなければならぬと決けつ心しんしました。

せんだつて降ふつた雪ゆきは、まだ町まちの中なかにも消きえずに、そここに残のこつていました。彼女かのじよは夜よるになるのを待まつていました。その夜よは、いつになく空そらが清きよらかに晴はれて、青あおくさえたうちに星ほしの花はなの

ごとくきれいに乱れていました。その一つ一つ異なつた色の光を
 放つて、輝いていたのであります。彼女は、寒い風が吹く中を
 ある、町の西のはずれにいたりしました。そこには、大きな河が
 歩いて、音をたてて流れていました。あたりは、一面に煙るように青白
 い月の光にさらされています。この河のふちは、一帯に貧民窟
 が建て込んでいて、いろいろの工場がありました。どの工
 場の窓も赤くなつて、その中からは機械の音が絶え間なく聞こ
 えてきました。そして建物の頂にそびえたつた煙突からは、
 よるあおそらに、毒々しい濁つた煙を吐き出しているのでありま
 した。

彼女は、ある工場の前では、多くの女工が働いている

のだと思おもいました。また、鉄てつ槌つゐの響ひびいてくる工こう場じょうを見みては、
 多おほくの男おとこの勞働者ろうどうしゃが働はたらいているのだと思おもいました。その人々ひとびと
 は、みんな、このあたりのみすぼらしい家いえに住すんでいるのだと思おも
 ったときに、彼女かのじよは、自分たちじぶんはどうしてここに生うまれてこず
 に、金持かねもちの家いえへ生うまれてきたか、しあわせといえ、そうであ
 るが、そのことが不思議ふしぎにも思おもわれたのでありました。
 ここを離はなれて、だんだん寂さびしい野原のほらにさしかかると雪ゆきが深ふかくな
 りました。手足てあしは寒さむさに凍こごえて、ことに踏ふむ足の指ゆび先さきは、切きれ
 て落おちそうに、痛いたみを感じかんじたのであります。
 どこを見みましても、あたりは、灰はい色いろの雪ゆきにおおわれていまし
 た。そして、あの天てん国ごくで聞きこえるであろうような、よい音ね色いろも、

また輝かしい明かりもさしていませんでした。彼女は、せつかく子供にあえると思つて、苦痛を忍んで歩いてきたのでした。

彼女は、葉のない林の中に入ってゆきました。そこにも明るいほど星の光はさしていました。

「どこに、私のかわいい子供がいるだろう。」

彼女は、こう思つて、灰色の世界をさがしていました。

このとき、すこし隔たつたところに、黒い人影が人のくるのを待つているように立つていました。彼女は、その方に歩いてゆきました。すると、髪の毛を乱して、やせた女が子供を抱いて立っていました。その女は泣いていました。彼女が近づくと、みすばらしいふうをした女は、

「どうか助けてください。」といいました。

彼女かのじよは、もつと近づちかいて、よくようすを見みますと、この工こうじ

場ようまち町すに住すんでいる貧乏びんぼうな若い女わか房にようぼうでありました。

「おまえさんは、こんなところに立たって、なにをしているのですか？」と、彼女かのじよはたずねました。

すると、やせた貧ますしげな若い女わかおんなは、

「私わたしたちは、この子供こどもを養やしなつてゆくことができませぬ。それで、

だれも、もらつてはくれませんから、かわいそうですけれど、ここへ捨すてにやつてきたのです。けれど、やはり捨すてられないのでもらつてくださる人ひとのくるのを待まっていました。」といいました。

彼女かのじよは、これを聞きくとびっくりしました。

「まあ、こんな雪の上へ、子供を捨てる気なんですか。」といつて、やせた女を見すえました。

やせた女は泣きながら、

「奥さま、私たちは、この子供があるばかりに、手足まといになつて、どんなに困っていますか、どうかお慈悲をもつて、この子供を育ててくださいませんか。」と頼みました。

金持ちの妻は、心の中で、不思議なことがあるものだとおもいました。

「まあ、どんな子供ですか、私に、見せてください。」といいました。そして、星の明かりに照らして、やせた女に、抱かれている子供の顔をのぞきました。星の光は、下界をおおうた雪の面に

反射して、子供こどもの顔かおがかすかにわかつたのであります。けれど、その子供こどもは、彼女かのじよが探さがしている自分じぶんの死しんだ子供こどもではありませんせんでした。

「この子供こどもは、わたしわたしの死しんだ子供こどもじゃない。」と、彼女かのじよはいいました。

やせた女おんなは、しくしくと泣ないていました。そのようすは、いかにも哀あわれに見みられました。

「奥おくさま、どうかこの子供こどもを育そだててくださいませんか。そうしてくだされたら、私わたしどもは、どんなに助たすかりましょう。」といいました。

かねもかねもの妻つまは、私わたしがこれほどまでにせつない思おもいをして、神かみさ

まに願ねがっているのも、みんな死しんだ自分じぶんの子供こどもがかわいいからのことだ。自分じぶんの死しんだ子供こどもが、永えい久きゆうに帰かえつてこないものなら、なんで、見みず知しらずの人ひとの子供こどもを苦く勞ろうして育そだてることがあるう？

わたしは、あくまで、私わたしの死しんだ子供こどもを神かみさまから返かえしてもらわなければならぬと考かんがえました。

「私わたしは、いま自分じぶんの子供こどもを探さがしているのです。それが見みつかるまでは、知しらない人ひとの子供こどもをもらうことはできません。」と、彼かのじ女よは断ことわりました。

やせた女おんなは、絶ぜつ望ぼうして、ため息いきをついていました。

「奥おくさま、子供こどもはみんなかわいいものでございます。しかたがありません。私わたしは、またこれから、この子供こどもを育そだててくださる人ひとを

探さなければなりません。」といつて、やせた女はしおしおと、
 彼女の前を離れて雪の上をあちらに歩いてゆきました。

彼女は、このとき、女のいったことをよく考えてみました。

そして、だんだん遠ざかってゆく哀れな女の姿を見送りながら、
 もう一度、あの子供の顔をよくながめて、どこか死んだ自分の子
 供の顔つきに似ているところがあつたら、もらつて育てようかと
 思いました。

しかし、こう思つたときは、もう遅かつたのであります。もは
 や、どこを探しても、やせた女の姿は見えませんでした。

雪の上を、空の星の光が、寒そうに、かすかに照らしていまし
 た。彼女は、寒い身にしみる風にさらされながら、なお、死ん

でしまった子供を探して歩いていました。

その夜、遅くなつてから、彼女は疲れて、空しく町の方へ帰つてゆきました。

この二人の夫婦は、それから、長い間、子供というものがなく、さびしい生涯を送つたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「婦人公論」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「星《ほし》の子《こ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星の子

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>